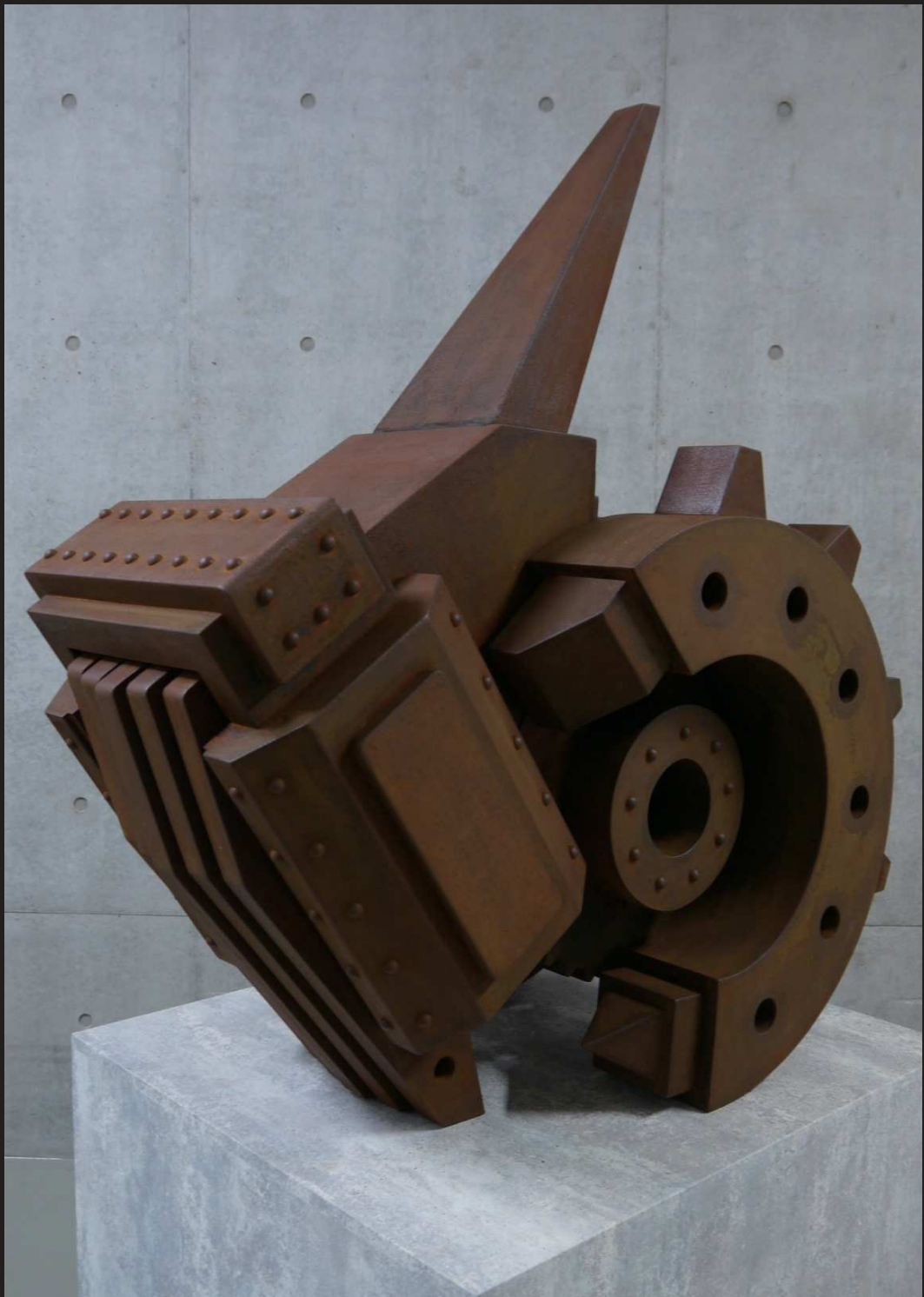


自由美術

2018・3・10



目 次

新会員の紹介

P1

《平面部》	青 砥 伊 臣	坂 口 けい子	大 石 佳 子
	旭 美知夫	大 塚 和 子	田 中 敬 子
	有 田 敬 子	大 野 恵 子	田 中 雅 子
	五十嵐 久美子	小笠原 尚 子	藤 井 明 枝
	泉 田 純 子	星 功	岡 田 千 里
	一 井 リツ子	岡 田 実	本 間 公任子
	井 野 美 彦	加 藤 精 子	森 田 優 子
	今 井 忍	工 藤 牧 子	吉 田 朱 里
《立体部》	中 西 保 裕	辻 本 又 慶	坂 内 道 子

受賞者の紹介

P19

自由美術賞 《平面部》	圖 子 秀 達		
《立体部》	山 崎 史		
靉 光 賞 《平面部》	小 暮 芳 宏	坂 内 義 之	
平 和 賞 《平面部》	一ノ澤 文 夫	美 濃 俊 幸	
《立体部》	松 本 正一郎		
新 人 賞 《平面部》	古 川 悦 子	斎 藤 有希子	菅 野 幸 恵
《立体部》	中 西 保 裕		
佳 作 賞 《平面部》	前 田 珠 紀	濱 野 春 美	越 川 道 江
	竹 井 侑 子		
《立体部》	芹 田 静 枝	城 所 真 衣	

‘16 新人賞展を見て

P29

脱・変身譚 宮下光子さんへの手紙	石 田 貞 雄
吉崎紀子 「黒い線」から光の道すじへ	小 川 リ エ
辻 忍さんの作品について	長 嶋 栄 次
辻本さんの作品を見て	渡 邊 知 平

展覧会より

P34

的場脩二 展「記憶の変容」	小 野 精 三
---------------	---------

追 悼

P35

ニシオトミジ兄の仕事	森 田 廣
赤堀正巳氏を偲んで	久 松 孝 彦
よろずふきこさんを悼む	吉 見 敏 治
中尾知子氏を偲んで	山 崎 由 佳
澤田昭英氏を偲んで	谷 内 徹

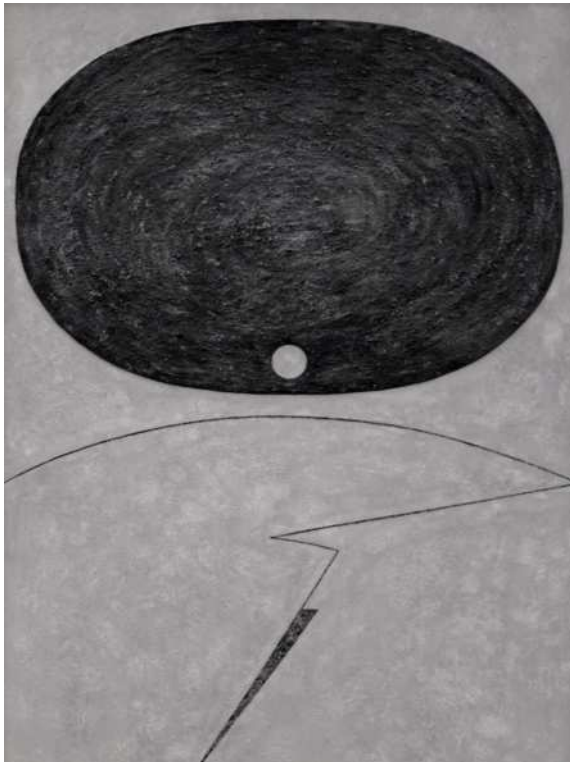
個展・グループ展記録

P41

新会員の紹介

辿り着いたモルタル

青 砥 伊 臣



「頬杖をつく穴」

私の作品は、単純な線と形態を組み合わせた構成の為、フォルムが際立つように、形態と空間との境界は曖昧にせず、輪郭をクリアにしている。視覚的に分かりやすく作品を完結させたので、終点とするべき位置に不等辺三角形を配置している。明快で調和のとれた画面を構成する上で、不等辺三角形は要であり、他者と区別するための目印や、記号の役目にもなっている。

描画材料にモルタルを使用しているのは、媚びない質感に惹かれたのと、堅牢な画面を作るのに最適だと考えたからだ。完成までの明確なヴィジョンはあるが、求めていた理想の形にはいつも遠く及ばない。素材そのものが持っている美しさを生かせるように、試行錯誤を繰り返している。

様々な素材を試して辿り着いたモルタルで、何一つ増減できないところまで形を追求していきたい。

新会員の報告を受けて

坂 口 けい子

絵ばかり描いていた幼い私の手を引いて、母が連れていってくれたのが故・自由美術協会の岡本実先生の教室だったというのも、何かの縁かも知れない。

大学では心理学を学びつつも、一方では図書館に入り浸り、主に絵画彫刻や民俗学の書物ばかりを読み、そして傍らにはいつもスケッチブックがあった。

どういうわけか私にとって、描くという作業は自己の内面と向き合い、心のバランスを保つ大切な工程でもあった。

実家である熊野に戻った私は今なお雄大な自然と伝承が多く残るこの地を表現したく、自由美術協会でもある坂内義之先生の元で油絵の基礎を学び、先生の勧めで1999年自由美術展に初出品し初入選した。



「森羅萬象」

当時、初めて訪れた上野の東京都美術館で感じた高揚感を今でも覚えている。

その後2人の子供を授かり、大きな喜びの一方、父を失うという出来事も経験した。

そんな中、念願でもあった絵画教室を開講する事が出来た。

この様に、様々な事を乗り越えつつも毎年出品する事が出来たのは、家族や周りの人々の理解と協力のおかげだと感謝している。

更に、今回の推挙を受け、制作の喜びをかみしめつつ、気を引きしめて熊野の圧倒的な自然のパワーを源とし、自分なりの表現法で自分の想いを爆発させたい。

ここからが本当のスタートだと再確認し、作品一つ一つに魂を込めて表現し続けたい。

自由美術との出会いを大切に、日々精進していきたい。

自由美術協会新会員になって

大石佳子

この度は思いがけず会員に推挙いただき誠にありがとうございました。

多くの素晴らしい先生方が活躍されておられるこの自由美術協会に少しばかり関わらせていただけることに心より感謝いたします。

初入選の時から美術展を見に行く度、圧倒されてばかりでしたので今の自分は想像すらできませんでした。ただ諦めず描き続けてきて本当に良かったと思います。

これもいちからご指導してくださった先生はじめ応援していただいた皆様のおかげと深く感謝いたしております。

三年前にこれまでと違うモチーフに作品を大きく変えてみました。変えた当初よりも、その後が大変で悩みの連続でした。まだまだ未熟で



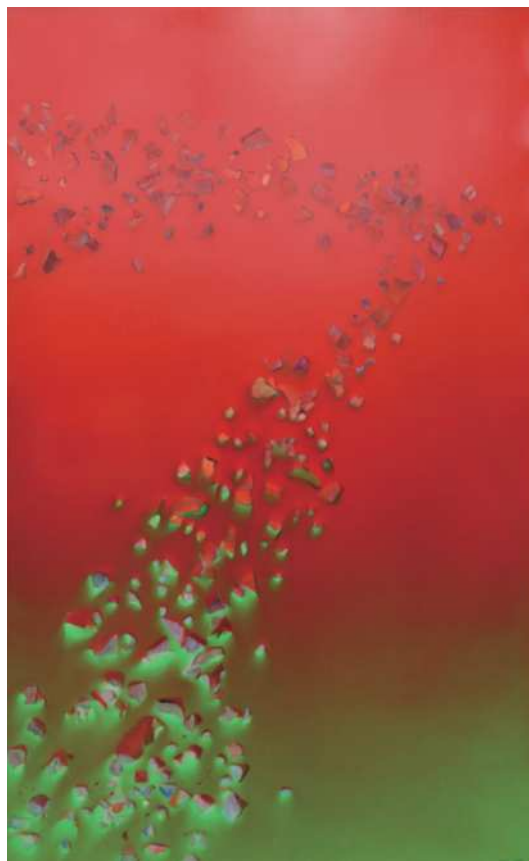
「断片 (II)」

力不足です。

これからは新たなスタートのつもりで、描く

ことに真面目に取り組んで悩みつつも少しでも
愉しんでいけたらと思っております。

新会員として



「image 2017 (I)」

1991 年、先輩会員の吉野誠氏と二人展を開催した際、「自由美術に出品してみませんか。」の一言がきっかけで出品を続けてきました。

広島支部には相当な力量を持たれた会員の方々がおられ、その一人一人の個性や主張が明

旭 美知夫

確に伝わってきました。そんな中で自分らしい作風を出していくのは至難の技とも予想していましたが、広島支部展である「黄人展」を開催していただく中でその都度アドバイスをいただけてきました。個々のディティールの表現については率直な意見をいただきながらも最後には「自分の描きたいように描くことだね。それが自由美術なんだよ。」の言葉で毎回締めくくってくださいました。当然、数回の落選も経験しましたがそれはそれで次への発奮材料となってきました。

この間、自由美術協会の発足から現在までの歴史を紐解きながら自分の生き方とも重ね合わせていくうちに波動のあった造形集団であることを実感しています。

高校1年生の時、美術の教科書に掲載されていた「眼のある風景」から呼吸が止まるほどの衝撃的な印象の洗礼を受けてから40数年。鑿光たちの係った戦前からの美術集団の会員として迎えていただきましたことに感謝申し上げます。そして、皆様とともに更なる高みへむけての研鑽を積んでいく決意表明の場とさせていただければと思います。

新会員になって思うこと

大 塚 和 子

戦後間もなく大分市のはずれの山間部に生まれ育った私は、小学校の頃から学校のまわりの風景画ばかりを描いていました。ある大きな写

生大会で入賞して、賞品に24色入りの水彩絵具をもらってとても嬉しかったことを覚えています。



「山かげ」

そうした原風景が潜在意識の中にあると思うのですが、絵のモチーフを考えると、広々とした海よりも山や川の地面に近い風景、新しいものよりも古めかしく苔むしたようなもの…と

好んで、気の向くままにモチーフを探して歩き回り、スケッチや写真をもとに作品作りをしています。

自由美術展には十時良先生（自由美術協会会員）に声をかけて頂き、指導を受けながら出品を続けてきました。

回を重ねる毎に難しく考えるようになりいつも慌ただしく混乱の中、搬入に間に合わせているような状態です。

具象と抽象の間をうろうろ、行ったり来たり、まだ何も分からないで描いている、これが今の私の実感です。

もっとしっかりと地に足をつけて制作をしなければと、これを機にキャンバスに向かう時間を増やしたいと思っています。

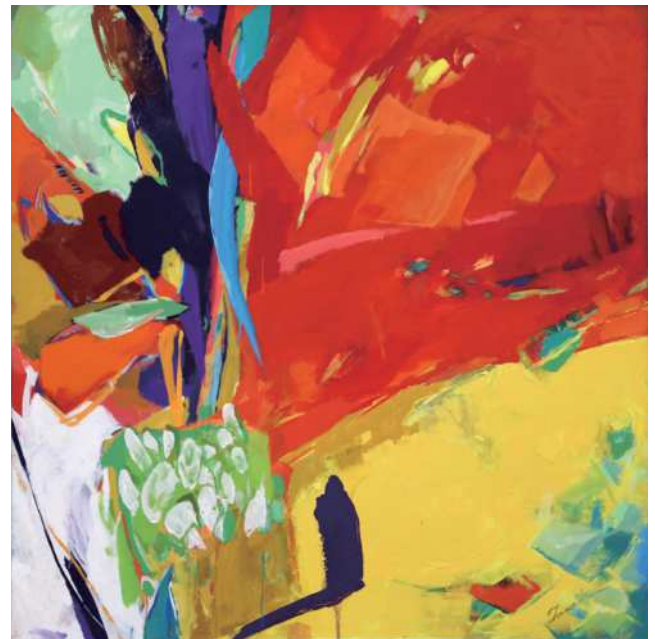
この度は新会員に推挙していただいてありがとうございました。

体 と 絵 画

田 中 敬 子

念願叶って晴れて自由美術の会員となった喜びを、改めて制作の指針とともに記しておく。自分の背丈より大きなキャンバスは、そびえたつ真っ白な空間だ。（空間がそびえるということもおかしな表現だけれど）その大きな空間に、一本の線が、自分の呼吸の深さに連動し、うねる線のカーブが、筆を握る力や、足の踏ん張りで様相を変える。空間をどのくらい広げていくか、凝縮させていくか…筋肉が緊張し、ゆるむ感覚。目の前に浮かびあがる色と形と身体が一体になり美しいハーモニーを奏でる。

自分の身体が楽器にでもなったかのような感覚だ。絵を描く時、私は自分の肉体を強く意識する。それは、普段は上手に隠している欲望をまざまざと感じさせ、肉体をもつ喜びも呼び起こす。自分が人間なんだなあと妙に愛しく感じ



「フラワー・オブ・ライフⅡ」

る瞬間だ。

日々、何を観て、何を聴き、どんなものに触れて生きているのか。体を通して受け取ったものと同時に、体を通して抽出された貴重なエッセンスが具現化されたもの、それが私の現在の絵だ。そして今回、会員となり、自由美術とい

う安住の地を得たとは思わないが、ここで更に貪欲に、己の本当に望んでいるものに素直に向き合い、透きとおった本質の表現へ肉迫していく…そんな絵画の一片を、この体を携えて描きつづけていく。

今の私



「イシノハナ・I」

永い時間をかけてかたちづくられたものに心惹かれる。落ちてきた雫から形が出来ていく。脈々と造られたそれらを目の当たりにした時、

有田敬子

その形の美しさと共に、対峙している私が存在する時間の短さと刻々と過ぎる事への恐ろしさ、だからこそそのいとおしさを感じる。

画面全体からそんなことが表現できたらと思い制作しています。

自由美術展は造形・色彩のよろこびにあふれる素敵な作品が多く、その中で自分の作品が展示されとてもうれしく励みになっていました。岩絵の具を用いて作品を描いてもうすぐ30年になりますが、自由美術展ではかけだしたばかりです。

このたび会員に推挙していただき、正直な所とても驚いています。まだまだ自分の身の丈に合っていない事ですが、私のこれからの作品を会員として承認してくださった方々に感謝し、発表の機会をいただける事を前向きに受け止め精進したいと思います。

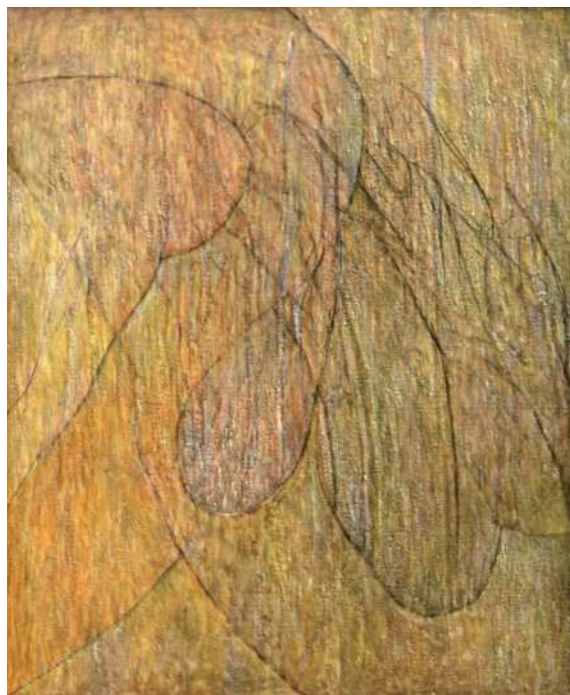
入会に際して

私と自由美術の出会いは、大学卒業時に溯ります。これから先、どうやって絵を描いていこうかと迷っていた時に、自由美術の会場を回って、他の公募団体より「線や色そのものを大事にしているなあ。」と感じました。それから出品するようになり、落選、入選を繰り返して今

大野恵子

に至っています。学生時代、周りは、モノ派やコンセプチュアルアートが盛んで、その中で私には何が出来るのだろうと悩み、焦ってばかりいました。でも私は絵を描くことが好きだし、色や形の世界に魅かれるし、最先端を追い続けるよりも、日々の生活の中から紡ぎだされる情

感を大切に表現していきたい、そう思うようになるまで時間がかかりました。今でも、時々、「どうして絵を描くのか」と悩むときがあります。それはやはり学生るとき、ある教授に「時代をどう表現するのか、常に考えなさい。」と言われた言葉がずっと頭に残っているからです。時代をどう表現するのか。それは、時代に迎合していくことではなく、むしろ抗うことで表現できるものなんだろうと思います。時代に抗う表現…できた作品からは微塵も感じられないのですが、混沌とした画面の中から自分にぴったりとした形が生まれた時の喜びは、何物にも代えがたいもの。そこに依拠して、これからも作品を作っていこうと思います。



「森の人」

絵 と 私

田 中 雅 子



「再成」

油絵を始めた時から、具象画の公募展に出品、結婚後は、夫の転勤に伴い、勤務先の市展や県展に出品、そして関東に来てからは、具象の会の公募展に出していました。各展覧会への参加もありましたが、1年の目標のように50号などの大作を描くのは、私のエネルギーの源のようでした。描くうちに、画題は次第に変わっていき、抽象画を学びました。

ああー、こう描いてもいいのだー。と衝撃を受け、目の前に全く新しい世界が浮かび、自由に筆を動かすことに喜びが膨らみました。

自由美術展は、郷里の岡山のつながりで、以前から何度か展覧会を見ていましたが、自分には合っていると思い、方向の変わってきた作品で出品しました。

初回は落選。でも、絵の写真を持って事務所を訪ねると、丁寧に絵についてのアドバイスをいただき、感動しました。具象画の会とは全く違った私の求めていた視点からの言葉に、続け

る勇気をもらい、次の年には入選できました。以降、出品を続けています。毎回の展示に、作品を前にして批評をいただくことが、次への制作の力になってきました。ただ、回を重ねるうちに、のがれられない自分の弱点に重くなり、立ち止まっていました。今回は、自分はこれし

かないと、もう一度筆をとってみると、とても元気がでてきたのです。

“描く”それは生きる力かもしれない。そんな思いの作品ができて、そして会員推挙をいただきとてもうれしいです。

私の中の自由美術

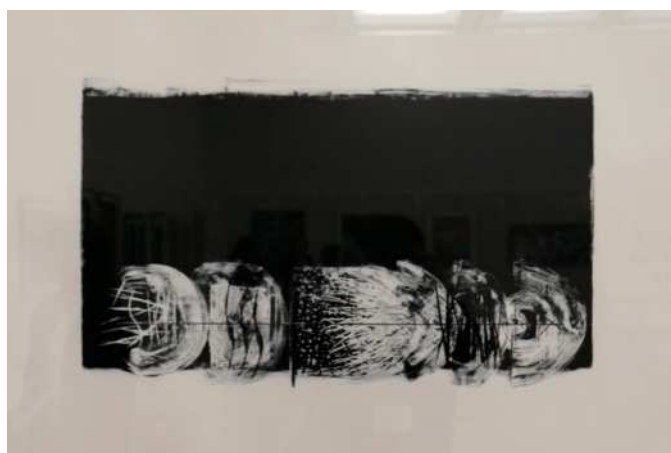
五十嵐 久美子

以前から銅版画による、線の美しさや凛とした女性像が素晴らしく、とても大好きな小貫政之助の展示が（2017年3月21日～6月25日）東京都国立市の、たましん歴史・美術館で開催されました。

氏は自由美術に出品（昭和27年～43年まで）し活躍していらっしゃいました。

その他にも歴代の素晴らしい憧れの松本竣介氏、浜口陽三氏などの、先達者たちにより、築き上げられて来た自由美術協会に、今回新しく会員として迎えられた事を大変嬉しく思います。

今回は、リトグラフでの作品でしたが、これに囚われず、前回出品した mixed media や油彩など色々な物に挑戦し、これからも自分の内



「クロスト」

なるものを絵の中に投影しつつ、時には実験をし、トキメキながら描いていけたらと思っています。

どうぞ宜しくお願いします。

絵を描く

小笠原 尚 子

絵を描いていたと思いました。ただその気持ちだけで描き続けてきました。

太陽の光がキラキラと輝いて、木々の葉に反射する。自分を取り巻く大気がある。そういうことを感じながら、絵を描いていました。

特別支援学校に勤めていた頃、ペットボトルに油性マジックを使って絵を描く作業をしていると、普段はほとんど線を引くことすらしなひの生徒が自分の引いた線を凝視し、ひた

すらに力強く手を動かし始めました。自分の引いた線が重なり合って、光が反射してキラキラと光るのを、食い入るようにしっかりと見つめて線を引き続けるのです。純粋に線を引くことの大切さ、その軌跡を残すことのおもしろさを見せてもらったような気がしました。

また、高校に勤めていた頃、ある生徒が授業評価アンケートに「絵の具を使って混ぜて色をつくることに癒されています。」と書いていま



「気配 I」

した。自ら色を選び、変化させ自分の色にしていくという工程自体がその生徒には大切だったのだなあと思われました。色を選んで見つめながらゆっくりと混色していく。大切に、素敵な作業だと気付かされました。

この2つの出来事は、今の自分自身の制作の中で大きな位置を占めています。様々な絵画や表現があり、いろいろと変化しいくと思います。そのような中にも、線を見つめること、色を見つめることに対して、いつも純粹でありたいと思います。それを忘れない絵描きになりたいと思います。

新会員になって

自由美術協会会員に推挙されたというお知らせをいただき身の引き締まる思いでいます。

四半世紀前仕事を辞め美術専門学校で油絵を本格的に学び直していた頃、恩師から「ひとりで描き続けるのは大変なこと、どこかに所属して仲間を作ったほうがいいよ。」と言われたことがあります。いろいろな公募団体展を見て、簡単な言い方ですが肌に合うのは自由美術かなと思いました。恩師も自由美術の会員だったこともあり 22 年前から出品しています。

卒業してからは仕事優先で時間不足、不本意な作品を送ったこともたびたびあります。東京から家庭の事情で山口に帰ってからも山口自由美術の先輩方に励まされ出品は続けるものの集中して描けない時期もありました。

それでもこれまで続けられたのは自由美術の作品との出会い、人との出会いがあったからだ感謝しています。

藤 井 明 枝



「時の景 (2)」

私の絵には下絵はなく画面と対話しながら作品を創り上げて行きます。地塗り 2～3 回後自由に筆を動かしてウォーミングアップ、その後エーイヤーっと絵具を投げつけることもあれば繊細に重ねて透明感のある色面を作ったり、そ

の段階は自分が画面の中に入り込んで夢中になれる楽しいときです。

そのような経過を踏んで画面から浮かび上がってくる色や形から感じたものを再構成しま

す。描き進めるにしたがって絵をまとめようと
いろいろ邪心が出てくるのですが自問自答しながら心の収まりの良い正直なところを見つけようとしています。

思いを形に

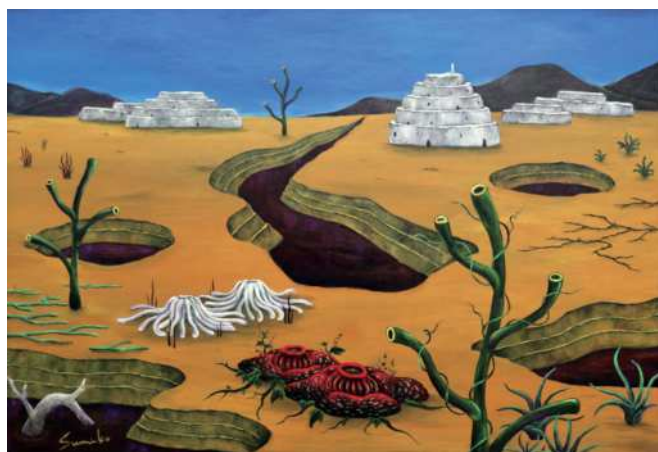
初めて自由美術展を観たのはもう20年以上も前の事で、個性的でメッセージ性の強い作品の数々にとても心を動かされました。

そんな憧れとも言える自由美術展への初入選はとても嬉しく、天にも昇る心地で会場へと足を運んだのですが、そこで自分の作品を見た時のショックは今でも忘れられません。周りに飾られている先輩諸氏の作品の輝きの中では自分の作品が酷く霞んで見え、初入選の喜びも自信も吹き飛んでしまいました。他の方の作品からは作家の思いや感情がひしひしと伝わって来るのに私の作品にはそれが無いと感じたのです。

それからと言うものどうすれば自分の思いを形にする事が出来るのか？そもそも自分が本当に表現したいものは何なのか？そんな事を考えながら試行錯誤を重ねて来ました。

十数年の時間が流れても未だに満足できる作品は描けず、投げ出したくなる事もありましたが、中部の会員の皆様からのアドバイスや励ましも

泉 田 純 子



「Playground2017 - 2」

あり、なんとかここまで来る事が出来ました。

初入選から会員推挙まで長い長い道のりではありましたが、これはゴールではなく新たなスタートラインであり、ここからまた少しずつでも前に進み、いつの日か胸を張って「これが私の作品です」と言えるような自分の思いが形になった絵を描けるようになりたいと思っています。

会員に迎えられて

50年前、夏期スクリーング、デッサンの指導は澤田俊一さんでした。次年平和美術展へ、そしてアンパン展へ、そこで知った自由美術会員の人々、作品、人となりに接して来ました。或る日、西村幸生さんに出品を勧められて出品、そして栃木自由に参加。澤田さんを知って

星 功

から50年の歳月を経て、辿り着いた様な気がします。もう残り少ない生命を、自由美術協会会員の自覚を持っていきたいと思っています。「生命の尊さ」「平和の価値」を微力ながら描き続けて行く決心を新たにしております。小生のテーマ「ホロコースト」については「心に刻む、

「アウシュヴィッツ平和博物館」の存続運動に深く関わってしまったことがきっかけでした。囚人服など遺品を手に触れ、記録画、実写真などを見、学習、募金、講演、マスコミ対応など大変でした。ガンの時まさかこのテーマで描くとは予想もしませんでした。

しばらくして、昔読んだブレヒトや新刊トーマス・マンやコルチャックの教育など読んで情

景を頭に描き、まず囚人のデッサンをしてみました。あの虚ろな目、絶望的姿、次々描いてみました。決心すれば描き続けられました。フランクフルト「夜と霧」は幾度も読んでみて、現代にも通じることが分かって来ました。描かれた人々の瞳には怒りと悲しみ、そして生きる希望を、それぞれ苦心しています。「私を見て」と心から願い込めて描き続けたいと思う。



「ア！アウシュヴィッツだ。」

新会員になって

岡 田 千 里



「Kumano - 2」

学生の頃から何かある度に無意識に見ていたアートがあります。学校の資料室に行くといつもそのコーナーを覗き、その本を見てワクワクし高揚する自分自身もいた記憶もあります。

アートは身近なモノで、私にとってはいつも側にある空気みたいな存在でした。

アートは見るもの!!!と思っていた私が、何年後に筆を持って描いている自分があることが不思議でなりません。

「アート×生活×仕事」が現在の私のライフスタイルで、この内一つでも欠けることはこれからも無いと思います。

これからも描いていきたいと思っています。

描くということ

一 井 リツ子



「SELVA - I」

ここ数年、「SELVA／森」をテーマに描いています。

広大な大地の広がる中南米諸国を旅するのが好きで、4年前世界的にも希少な雲霧林というエクアドルの豊かな森と出会いました。

開発のため消失してしまうかもしれぬこの森

へ思いをはせ、凝縮した生命を内包する森への憧憬を、自分なりのイメージに重ね膨らませていけたらと思っています。

自由美術には単独での制作に限界を感じ、何を描きたいのかを見失い呼吸困難に陥っていた頃、出品させていただくようになりました。何度も恥ずかしい想いをしながらも、曇っていた視界が少しは開けてきたかと、相変わらず悪戦苦闘しつつ筆を握っています。

昔見た「ベルリン天使の詩」という古い映画の中で、人間になった天使がこれまで感じられなかった、物に触れるという感覚を知り、1本の線を引く勢いやその重さという生の感触に、驚嘆し歓喜していたのを思い出します。同様に私の好きな油絵具の重さは、やはり他には変えられぬ高揚や喜びをもたらしてくれています。

最後になりますが、会員推挙に際してまだまだ実力不足の分、自分なりの新たな表現の探求を深めてゆけたらと思っています。

ありがとうございました。

美術の視野を拡げたい

岡 田 実

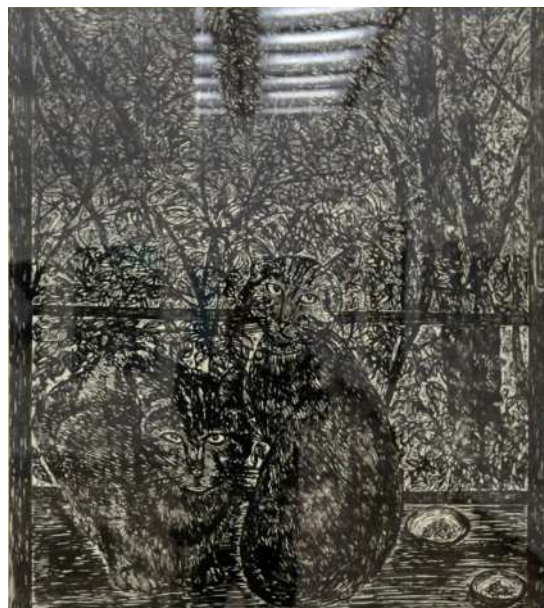
私が木版画に興味を持つようになったきっかけが二つある。小学生の頃である。一つは、毎年父が多版多色刷りの木版画で年賀状を作る様子を見ていたことである。小学生の頃から見よう見まねで、私もゴム版や朴の版木を彫って年賀状を作るようになった。父は切り出し刀の使い方を教えてくれた。彫刻刀で朴の板を彫る感触は心地よかった。二つ目は、父からもらった版画アルバムである。小学校6年生児童と教師

の顔が木版画で刷られ、顔の横に謄写版掘りで児童の将来の夢が書かれていた。私は、インクの香りとともに手作りの温かさを感じた。

私は、日常生活の見慣れた風景を題材にして木版画で制作している。自宅の裏山は県有林で、栗や南天の木などがある。ヒヨドリや鳩が鳴き、猪やリスを見かける。「猫のいる風景」は、飼った猫がぐつろいでいた森の風景を表した。私が風景を見ているというより、風景が私を見てい

るような印象を意識して制作した。

私は、木版画を制作する過程で悩むことが多い。中部自由美術展やそのメンバーによる版画グループ展の際に、学習会があり、とても勉強になっている。画面構成や技術面などについて助言をいただけるからである。今まで東京には縁のなかった私だが、会員になったことをきっかけに東京へ赴き、美術の視野を拡げたい。



「猫のいる風景 1」

感謝のうちに自然に描いていきたい 本 間 公任子



「風の声が聞きたい？」

会員推挙の一報を受けたとき、まず素直に「よかったあ」と思いました。そして次に、湧き上がってきたものは「描かなくちゃ」という焦りにも似た思いでした。現在その思いは、私の心を支配していて、画面を前に気持ちが空回りしています。

私と絵との関係が、大きく変わったのは、高校生のときでした。学校は自由な校風で、当時

は100分授業でしたから、2時間続きの美術の時間は200分あり、その間どこで何をしても自由でした。出来上がった作品は、壁に並べてそれぞれが思うことを言い合い、先生は何も言わなかったと記憶しています。同級生の多くは、いつも千鳥が渕やら、赤坂やら、思い思いのところへ、写生と称して遊びに行く中、私は美術室に残って、コンテとクレヨンと水彩絵の具で、半具象の絵を描いていました。そこは私にとって居心地がよかったし、何より楽しかったのです。絵は何を描いてもいいのだと気付いた瞬間でした。そして、それまでほぼ無縁だった絵と親しい関係になったときでした。

それから紆余曲折あって、再び絵を描き始めたのは、高齢者の仲間入り間近になってからでした。今は、無理に作るのではなく、出て来るものを感謝のうちに受け入れて、自然に描いていけたらいいなと思っています。

新 会 員

井 野 美 彦



「残りの風景 F」

絵が好きな息子に鲁迅は「絵は見るだけは自由、描くのは難しい」と遺言したらしい。凡人のやる仕事ではないと言っている。

いい歳をして私は、未だに無謀にも、オリジナルで誰もみたこともないような新しい絵を描けないものかと思っている。現実には、仕上げてみるとことごとく凡作だ。絵は何百年もす

に描き尽くされているので、オリジナルであるためには他にどんな絵があるか、特にコンテンポラリー・アートを多数みなければならない。一見していいと感じた絵が、見続けていると何も伝わってこない平凡作であることがある。すぐいいと感じた作品は、すでに先人が成した表現だったこともある。よくわからないが何かザラついて引っかかって気になる作品を見つづけていると、今まで見えてなかった世界が見えてくることもある。自分好みだけで作品を見ていると視野は広がらない。

新しいアイデアを求めて自分の中をかき回してみても、たいしたものではでてこない。世間にあふれる物・人・事をどう感じ、思うかをどう表現するかが難しい。今、他に急ぐことは何もない。次作こそはと期して新しいアイデアを探して長い一日を過ごしますが、残る年月は短い。

絵 画 す る わ た し

加 藤 精 子

“第81回自由美術展1点入選しました。”のお知らせを受けて出品者証を持参して会場に足を運んだ。会場に入り2室の壁面中央に自分の作品をみつけた。精子の画はいつも部屋の角っこか、陰気な部屋に陳列されているのに今回は新会員というおまけまでが付けられてあった。内心うれしかったが、現実的には困惑状態。会員として活動できるか絵画する姿勢は変わらぬと思うが画が描けなくなるのではないか、画が出来なくなったら私は死ぬことと同じだと思っているから。



「共存 '17-7」

画が描きたい、表現したいとは何だろう。「生きるの構図」の追求、理想とロマンは何もないという事実（理想・ロマンの究極の意味）を墨とか絵の具を用いて文字・形を借りて時に

は何もない事実を求めて、画面の向こうからの情景を描写する。人間の深さ、内面美が表出されればと願う。この時勢を語る、生きる自分の生活に執着して……絵画する。

絵とこれからの私

森 田 優 子



「繁殖するころⅡ」

私が自由美術に入って4半世紀、長い道程でしたが割とのんびり育てられたという感じです。

この度会員推挙に当たり、さあ、これからどうしようか、戸惑い緊張気味です。

40代半ば頃、大成瓢吉先生のお教室で絵を学び具象が苦手な私にとって絶好な所でした。7～8年後自由美術に応募する。初出品は水彩で3回続け、その後油彩に変わり、それからが大変で長い試行錯誤の苦しい年月が経ちました。

絵は若い頃デッサンを勉強していた事と、大成教室でのパフォーマンスで訓練された成果が出ているのでしょうか。これからも研鑽を積み色彩の調子や、大胆なタッチ等を考慮し、少し自信を持って絵が描けるように力強く歩めたら嬉しいです。

自由美術が好きで長く続けられた事と、尊敬する先生達、会員の皆様、又は一般の方達と絵を描けるのは喜びでもあり、励みとなり感謝致しています。

これからは少し自由な気持ちになり、現在描いている「繁殖するころ」がどのように変化するか分かりませんが、もっと追求していったら何かが見えてくる様な感じがします。

新会員として

今 井 忠

自由美術協会へ迎え入れて頂き有難うございます。学生時代、講師室入口に貼られていた自由美術協会展の案内をなつかしく思い出します。当時私はまだ公募展出品にはほど遠く、自

分の力不足を実感して学内だけでなく夜間の美術研究所へ通い勉強し直していました。卒業後、その美術研究所が主催する公募団体展へ出品し始め、その後会員として長く在籍することにな



「one time」

り、自由美術協会展からは遠のいてしまいました。しかし、自分の作風が半抽象へと移行していくなかで、その具象系の会とは方向性が合わなくなり、退会を考えていた頃、ある作家の個

展へと足を運びました。作品は大変素晴らしく、作家御本人と話をしてみると自由美術協会の元会員の方だとわかりました。その方の絵に対する情熱と絵画理念、そして何よりも「自由美術協会は良い会ですよ」の一言が、私の気持ちを動かしました。新しいチャレンジをその会でしてみようと。長い回り道をしましたが、今はこの会の良さが見い出せて、かえって良かったと思っています。

毎年出品するなかで感じていますのは、自己の内面に率直に向き合って制作した作品が多いようだという事、先達の作家の精神が今も会員作品の中に流れているようで、それらが会場で饒舌過ぎない心地好い空間を作り出しているようだという事です。この空間の中で、私は自分の次の課題を見い出して制作に励みたいと思います。

新会員になって

工 藤 牧 子

新会員に推挙ありがとうございました。私の絵のようによわい絵は公募展には向かないと思っておりました。

実際言葉で言われたこともございます。にもかかわらずの推挙、今までみて下さった方がいらっしゃること、とてもうれしい気持ちです。

今後もこのよわい絵たちにつきあっていく決心をさせてくれました。

感謝です。ありがとうございました。



「羽根より軽い雪Ⅰ」

私の絵について

吉 田 朱 里



「まえばれ」

この度は、新会員に選出していただき、ありがとうございます。誠に光栄であり、同時に身の引き締まる思いです。

常日頃から「生活の中に息づくもの」をコンセプトに創作しております。私の中のアートと

は、突拍子もない所から生まれるものではなく、自然に自分と共存する存在です。それを形に出来ることは、私にとって最大の喜びであり、そして、これが許される環境に感謝しています。地方に住みながら、作品を発信できる時代になったこと、また、発信の形が多様になったことが、私の今の活動を後押ししていると思います。

これからの課題は、テーマの幅を広げること。多くの経験や繋がりがあってこそ広がるものだと思います。

今後も、自分らしさを見失わないよう、精進してまいります。

ご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

彫刻制作のめざめ

中 西 保 裕

今回の新人賞、会員推挙を拝受し、今後は経験豊かな優れた自由美術会員の方々と共に作品制作が出来る事に感謝しております。3年前

に大阪府下での市展しか経験の無い私が、何もわからずに自由美術展に出展をした時は未だ彫刻とは？という大きく深い考えには、恥ずかし



「天空の刻」

ながら至っておりませんでした。皆が驚くような良い作品を作ってやろう。今回の作品はどうだ！というような心境の時、決まって評価は良いものではありませんでした。しかし秋の展覧に向けて、春から素材と向き合い、時には石と格闘しながら制作をしていく過程で、ふと多くの方の応援と協力のもとで、作っているというより、作らせてもらっているという思いが強くなってきました。そして街角で形のある物全てが作品に思えたり、朝早く目覚めた寝床で夢か現実かの狭間で、綺麗な曲線が浮かんでは消え、

朝日が差し込む工房のシャッターを上げると、まぶしいくらいの未完成の作品があり、美術館で見るより生きている物のように愛しく感じられて、思わず墨付けをしては削り直す。というように制作に没頭していきました。彫刻制作を生活そのものと思うようになり、その喜びを感じるようになりました。自由美術の多くの先輩作家の方々とこの喜びを共有でき、気付きをもらい、より優れた作品の制作が出来ますよう努力したいと思います。

新会員となって（ある彫刻家との出会い）

辻 本 又 慶

若い頃故里を飛び出し絵の勉強にと思い東京を目指し、行き当たりばったりで大理石屋の職にありつき偶然にも大理石の彫刻台を届けた彫刻家にモデルを頼まれ、そのまま弟子となる。

小柄であられたけれども豪放磊落なその先生が自由美術協会員の峯孝先生でした。若い頃は絵と彫刻を国画会に出品しておられたそうで、私の大作の絵が出来るとオンボロアパートまで見に来ていただいた事もありました。

椎名町のアトリエでまず目についた作品が逆さまの彫刻イカルスと壁に掛けられていた海老原喜之助の見事なデッサンでした。

海老原さんが来たんだよ、とさりと話されてすごい事だなあーと思うばかりであとの質問もせずじまいでした。後年 30 数年後、熊本市現代美術館での海老原喜之助展の会場入口に海老原の両手を組んだ手だけのブロンズ作品がありました。

その作者が峯先生でした。

若い頃抱いていたなぜ海老原がアトリエにきたのか、その疑問が解けた瞬間でした。

末尾となりましたが、このたび会員推挙いただき有難うございました。これからも自分なり

の良い作品を出品し続け、自由美術協会を盛りあげられるよう精進したいと思っております。
宜しくお願い致します。



「アクロバット」

新会員になって

坂内道子

粘土に遊んで数十年になります。会津には"会津彫塑会"という彫刻サークルがあり当時30名近くの男女が会員として作品制作をしていました。私はそこで一ミリの粘土の重なり具合で別な世界を作り出す事が出来ることに驚きと興味を持ったことがきっかけで30数年間粘土の作品作りを続けることになりました。

作品は粘土を使ってのものなので人物をモチーフとして丸彫りや浮き彫りで、また線彫りの作品として石膏やFRPで模^{かたど}りしたり焼いたりして作品にしてきました。

自分を曝け出すことの勇気がなく、作ることにだけに満足を覚えていたのですが、主題を表現するには粘土だけでできるか、他のものを使うことは……と考えていた時期に、友人から自由美術展出品の誘いがあり、会の講師を勤めて下さっていた佐野俊夫先生が会員で"自由美術"は権威主義でないということだけを聞いて、会の理念などよく確かめもせず出品しました。

自由美術の、自由に考えられた題材の下に自由な材料で自由に表現された作品、を見ていて大変おもしろく私がそれまで持っていた彫塑・彫刻・立体表現に対する捉え方と違っていて大きな刺激と同時に共鳴も感じました。

与えられた制作時間を知ることは出来ませんが、自分なりの表現で主題に迫るべく努力を続けて行こうと思っています。



「風」

受賞者の紹介

自由美術賞を受賞して

自由美術賞 圖 子 秀 達



「風の海」

この度、予想もしなかった自由美術賞をいただき、大変光栄に思っています。ご推挙をいただきました皆様には深く感謝申し上げます。歴史ある自由美術協会において、偉大なる諸先輩方が受賞された自由美術賞。日がたつにつれ、今回の受賞を深く受け止め、改めて今までの自分自身の制作に対する姿勢や絵画表現について見つめなおしています。

私の絵は、具体的なものや形から発想することがほとんどない抽象画です。心象風景と言ってもいい作品です。今のような抽象的な表現になって30年になります。ちょうど自由美術展に出品するようになった年数に重なります。当初からアンフォルメルの圧倒的なパワーと形態に衝撃を受け、具体美術のあのエネルギーに刺激されたり、また、もの派の理論に傾倒、感化されていったりと、試行錯誤を繰り返しながらもこれらの表現が、今なお私の表現の根っこになっているように思っています。

制作をしていく上で常に気に留めていることがあります。一つは平面の絵の中に空間表現ができているか、図と地、色や形あるいはマチエールで対比や関係性を仕組むのもそのためです。絵と現実との対比がいささか難しい私のような絵では画面上でイリュージョンの空間表現はかなり重要です。もう一つは、自己満足の表現に終わっていないか、ご覧になる方が絵の前で立ち止まってくれるか、そこで何らかの対話をしてくれれば少しでも人を引き付ける絵になっているかなと思いつつ、この二つは、私の表現の永遠のテーマになっています。

最後になりましたが、自由美術への出品を声かけしていただきました谷本重義様、合評会で熱心に指導していただきました川添正次郎様、故市村力様、そして、自由美術香川グループの皆様に紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

ぼくの処女体験－野外彫刻の試み

自由美術賞 山 崎 史



「プロメテウスの鎖」

国立新美術館での展示のたびに憂鬱になる。万遍なく明るい照明、ピカピカの床、陰影は期待できず立体の存在感は薄らぐ、傷だらけの床を油雑巾で擦っていた昔が懐かしい。煤けて手垢がついた漆喰の壁に蠟燭の1本もあれば彫像は浮き上がり、影を引きずる思いの深いおまけもあった。この会場では質感も消え失せ素材の特性を発揮できない。野外展示がいいが、ぼくの仕事は素材的に野外に耐えない。だが長嶋榮次さんの木彫はどうだろう。強い日差しや風雨にさらされても偽らない自然の光がそそいでいる。素材をいじめても光を採ること。ぼくもやってみようと考えた。

今回の仕事「プロメテウスの鎖」は室内を念頭に作っていたものだが、まず台座を石に替えた。鎖は大阪の南港で船を繋いでいたものである。足錠と鉄の球体の重りは雨に濡れてたっぷり錆びればよい。民家の土台だった2本の栗材は合わせて太いボルトとナットで締め上げた。

強い日射しを浴びれば作品は白く乾くだろう。濡れれば色濃く重さを増やすだろう！初めての野外展示に気持ちが華やいだ。

展示を終えた作品は小さく見えて貧弱だった。辻忍さんが垂直になっていないからだと直してくれた。北村隆博さんが「おい見てみろ、鎖が揺れているぞ」と言った。本当だ、重い鎖が風に揺れていた。日暮れを待って会場に出かけてみた。暗闇に立っているぼろぼろの柱には壁の照明が当たって、地面に映る影は尾を引くように長かった。

作品はいま南河内の中西保裕さんの仕事場に設営してもらった。野外である。これから先、酸性雨を浴び、雪を被って凍り、灼熱の太陽がじりじりと焼きつけるに違いない。月光を浴びて青く輝く夜の出逢いがあるかも知れない。柱は朽ちて鎖は錆びて果てる。それでもぼくの生きている間はどっこい立ち続けるだろう。

この先にもう道は無い……

鬚光賞 小 暮 芳 宏



「章魚」

鬚光賞ということですが、語るだけの知識は無いので、鬚光については他に譲ります。

鬚光賞の受賞は、「この絵で良かったのかな。」というのと「ほっとした。」というのが正直な感想です。

元来が怠惰な性分なので、中途半端というか描ききれてない作品が多く、D氏やR. O氏には、その点をいつも厳しく指摘されているところであり、恥じ入るばかりである。

かつて自由美術には会員審査というものがあり、会員といえども落選の憂き目にあった。自由美術展はキャプションによる会員、非会員の区別をしていないため、「俎板の鯉」から解放され緊張感を失った会員作品よりも、審査くぐり抜けてきた一般出品者作品のほうが良く見えることが少なくない。それは展示にも反映されている。だから、会員になってからは、巡回展に選抜されて初めて「入選した」と思うように

している。

また、自由美術展の自由美術賞・鬚光賞・平和賞の三賞は原則として再度の授賞は無く、受賞歴のある作家を除いての選考であることは忘れてはいけない。

これらのことを考えるに、今回の鬚光賞受賞を悦びとするより、此れからはさらに厳しく「自らへの戒め」としていかなければならないだろう。

だが、これでやっと自由美術の一員になれたかなという安堵の思いもある。

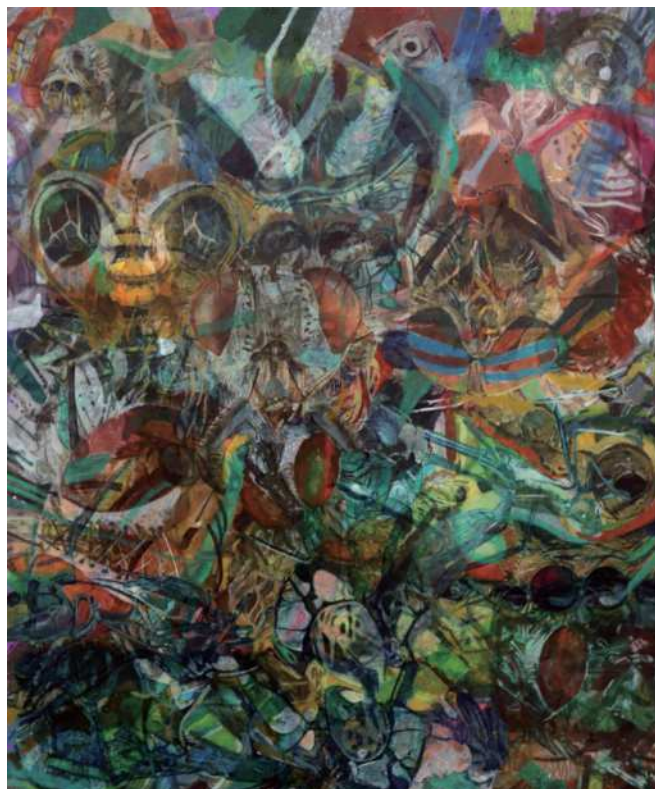
恥ずかしい話、自由美術展に出品するまで「自由美術」を知らなかった。

多くの素晴らしい先達に導かれ、たくさんの知己を得、自由美術という道標を頼りに、ここまでは来られた。

追伸 今回の鬚光賞受賞は望外の喜びであり、皆様のおかげです。ありがとうございます。

黠光賞を受賞して思うこと

黠光賞 坂内 義之



「喜怒哀楽」

大きな賞をいただきました。自由美術三賞の一つ黠光賞を受賞しました。

自由美術展懇親会の前日の夜、「黠光賞おめでとうございます」とメールが入り、びっくりして「エッ、まだ何の通知も来ていないのですが?」と答えると、会場に掲示してある受賞者通知の写真をメールで送信くれました。黠光賞坂内義之とありました。急ぎ手配をして、翌日の懇親会に出席しました。ありがたいことに多くの方から祝福を受けました。半世紀以上かかったの受賞となりました。

忍耐強くコツコツと制作に励むのも才能の一部と自分に言い聞かせつつ制作に励んだこと、「悟りとは覚悟なり」と50歳の時に絵描きとし

て生きていこうと覚悟を決めて教員を退職したこと、東日本大震災と同じ年の9月に紀伊半島大水害による大災害が起こり、毎日瓦礫の山を見ては、ひたすら自分の視点で制作に励んだこと、全てが黠光賞受賞につながったと思います。

創作意欲が益々強くなってきている今、受賞を新たな出発点と考えて、熊野に根差し、内面を掘り起こし、そこから生まれる苦悩や悲しみ、喜怒哀楽を独自の視点で創作して、心の器である脳の前頭前野を鍛えながら、より高みを目指して、制作に励みたい。

残り少なくなった人生を全速力で取り組んでいきたい。

平和賞を受賞して

平和賞 一ノ澤 文 夫

吉祥寺にあった武蔵野美術学園の学生だった頃、当時の先生でした藤村叡三氏、比田井希仁氏、澤田俊一氏を通して自由美術を知り出品しました。

思えば初出品が1989年でしたので出し始めて30年近くなります。

会員になってからは会員同士のグループ展も数多く経験させていただきました。

会の中での多くの人と作品の出会いが新たな刺激と描き続けて行く気構えを養わせてもらったのだと思います。

59歳の時大腸がんの手術をしました。その年から、いつ、何時、何か…という思いから自由美術規定ぎりぎりの150号を描くことにしました。善し悪しは判りませんが大腸がんが大作に向かわせるきっかけになりました。

賞を戴いた作品もその流れです。今回の作品は自分の中に宿る様々な不安のぶつかりうごめくものの響きをカタチにしました。

今、時代は自分にとって目が回るような変化の速さです。そして多くのきな臭い世界情勢、連続して起こる驚くべき事件、思いもよらない突然の災害。自分にとって不安だらけの日常の日々であります。がそれもまた描くエネルギーになっていいると思います。絵を描いているときに感じる実感を唯一の拠りどころとしてこれからも続けていくような気がします。

今回は思いも寄らない賞を戴きとても光栄に思っています。ありがとうございました。



「響」

平和賞を受賞して

平和賞 美 濃 俊 幸



「AERA —起点」

自由美術との出会いは、今を遡ること40年ほど前になります。当時、中学生だった私は秋田市で開催されていた「自由美術・秋田展」を見ました。抽象やシュールな作品が多く、会場全体がエネルギーに満ちており、「これが本物の絵なんだ」と衝撃を受けたのを記憶しています。

運命的に(色々とエピソードがあるのですが、紙面の都合上、割愛します。)私自身も自由美術に出品するようになってから20年になろうとしています。これまで、賞とは無縁でしたので、このたびの平和賞受賞は思いもよらない一報でした。

「自然と人工」もしくは「有機と無機」の対比に魅力を感じ、コンクリートで覆われた地面と枯れた大地を描いてきました。無機質な灰色の形へのこだわりや赤い粘土質の地面や枯草は

おそらく、私の幼少期の記憶に起因していると思います。そして、陥没した大きな穴と3色のラインは「どの選択がbetterなのか」と、日常生活の様々な場面で選択を迫られる私自身の思考の象徴なのかもしれません。

「コンクリートはもういいんじゃない？」という声が聞こえてきます。もっと、果敢に他のモチーフにも挑戦していくべきなのかもしれませんが、憶病者ゆえ自身の変化を期待しつつ、コツコツと自分のペースで仕事をしていくしかありません。

グラスを片手に「ああでもない、こうでもない」と考えながら、時には自己満足し、神の降臨を願いつつキャンバスと向かい合います。そして、AREAは時を変え、場所を変え、形を変えて増殖していきます。

平和賞を受賞して シャバーニ & アニー

平和賞 松 本 正一郎



「シャバーニ & アニー」

御影石 H.130 × W.100 × D.100cm

昨年（2017年）の1月の中部展出品のお誘いを隈部氏より頂き、出品作を見に名古屋の愛知県美術館に行きました。支部の皆さんお世話になりました。美術館見学と懇親会では大御所のお話を拝聴し、後は折角なのでどこか観光しようと考えていた時、宿泊先のホテルのエレベーターに割り込んで入ってきた外人がなんかゴリラばかったので、そうだ東山動物園に行こうと思い立ちタクシーに乗り込みました。

朝の動物園は餌を食べるタイミングで活気がありました。奥の獣舎に進むといつか会いたいと思っていたイケメンゴリラ「シャバーニ」とその家族がいました。ゴリラ舎の窓から颯爽と登場するイケメンは一つ一つのしぐさに風格がありさまになっています。

そんな男前のシャバーニを実物大の石で彫ろうと思い、帰宅後、再度実物を検証する為シャバーニの兄ハオコがいる上野動物園に行き目測

を行いました。（結果実物より大きくなり過ぎましたが）

娘のアニーも制作することにしました。アニーの母親は子育てをうまくできず誕生後衰弱してしまったことから、母親から離し1歳過ぎまでアニーは人の手によって育てられました。その後ゴリラ一家に戻す事になりましたがアニーが群れに戻るか心配したシャバーニは娘を守りました。同居は成功し優しい男前ゴリラはイクメンぶりを発揮しました。現在アニーは父親が心配するまでもなくお転婆娘に成長しています。

ニシローランドゴリラのオスは成熟するとシルバーバックになるのでグレーの御影石を選定しマウンテンのイメージで山のどっしり安定した形を、子供は逆シンメトリーで動きのあるやんちゃさを出し、岩山から飛び出た孫悟空にも見える構図にしました。

新 人 賞

‘17年受賞者による新人賞展は‘18年10月3日（水）～10月15日（月）
国立新美術館（自由美術82回展と同時開催）

古川 悦子

「醸（かもす）」



菅野 幸恵

「色にいつ'17 - 1」



斎藤有希子

「Twilight」



中西 保裕

「天空の刻」



佳作賞

'17年受賞者による佳作賞展は'18年4月9日(月)～15日(日)
PAROS GALLERY (大森)

前田 珠紀

「深層」

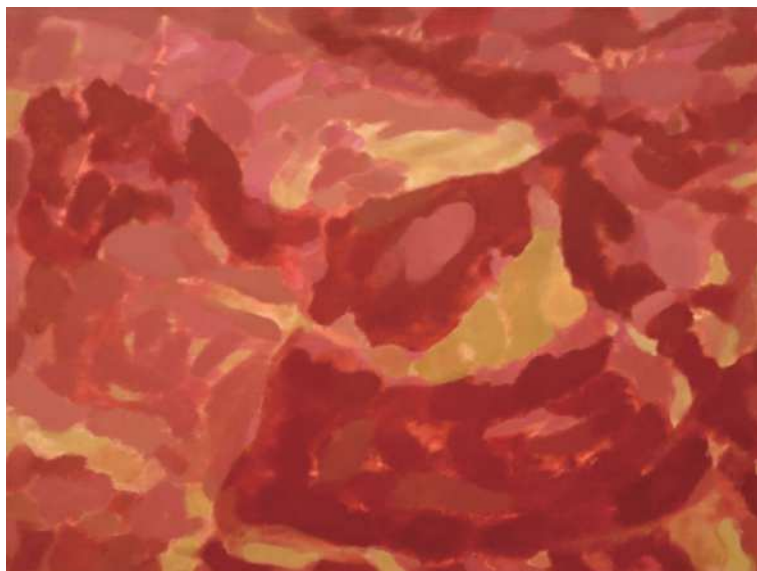


城所 真衣 「初夏」



濱野 春美

「譜音3」



芹田 静枝 「スマホ時代」



竹井 侑子

「宙へI」



越川 道江

「キノウカラノコト」



2016 年 新人賞展を見て（'17 本展と同時開催）

「脱・変身譚」 宮下光子さんへの手紙

石 田 貞 雄



宮下光子さん、昨年の動・植物の合体した様な作品＜変身＞の不思議な残像があるのみで、あなたの過去の作品は、私の脳裏にはありません。新人賞展と今展出品作品＜羽化＞の4点の作品世界に限定してお手紙します。(会場のキャプションを拝見してあなたが10年程出品している事を知りました。ご海容の程を) 一連の作品は正に宮下光子の変形譚。

このメタモルフォーシス現象はギリシャ語でメタが変化、モルフェーが形を意味し日本語では＜変形・変身＞生物学用語では変態になるようです。ギリシャ神話からウルトラマンまで、いやこのメタモルフォーシス現象を拡大解釈すれば、私たちの生きるこの世界は天地創世から現在まで、千変万化を繰り返すメタ現象の、未だ過程途上と解釈できます。描き続ける行為そ

のものがこのメタ現象と思い至った時点から、私には強い変身願望はありませんでした。只1960年代の学生の頃にはそれに類した小説は読んでいた記憶があります。アポリネールのオノレ・シュブラック氏は壁に、カフカのザムザ氏は甲虫に、安部公房のコモン君はデンドロカリヤという植物に変身する小説は今日でも脳裏に残っています。それかあらぬか。1971年には朝日新聞社主催の＜現代の幻想絵画展＞に私はカフカの短篇＜飢餓術師＞に想を得た作品を出品しています。小説ではワラくずと一緒に捨てられる一人の飢餓術師を、梃でも動かない8人の塊として作品に仕上げました。変身小説の閉塞的な世界への私の当時の反発だったのでしょうか。このお手紙を書きながらその様な思いが、私の内に去来します。

編集部の手島さんに送っていただいた、あなたの作品写真を前にその世界を言葉にできずにながめるなかで、宮下光子の変身譚は単なる作品の為のモチーフではなく、宮下光子自身の過去の作品世界との決別の為の自身の儀式なのだ。あなたの過去の作品を知らない私の直観的な断定がふと生じてきたのです。

性急裡に宮下作品は＜変身＞が必要になり＜夢想＞の内部で思考するなかで、動・植物には変身しないと。この＜変身・夢想＞の2作品は強い。抽象的な＜脱皮＞を果たしたあなたは、その状態のままで＜羽化＞する。この＜脱皮・羽化＞の2作品は未だ弱い。楽しみつつ作品を

押し進めていけばよい。この現象が抽象の原点と思います。この＜変身・夢想・脱皮・羽化＞の一連の世界には、宮下さんの次の作品に向かう冷静な意志と哲学を感じます。＜脱皮・羽化＞で一度解体させた世界を、そして私たちの生きるこの世界のリアルと自身の内なるリアルをあなたの目と心と手で構築していって下さい。

古い時代の中国には人体に羽がはえて仙人になるという信仰があった様です。宮下光子さんの＜変身譚＞に、この現象＜羽化登仙＞を進呈して、私の手紙を終わらせてもらいます。

そして宮下光子さんの今後の作品展開を、しっかりと拝見していくつもりです。

吉崎紀子「黒い線」から光の道すじへ

小 川 リ エ



対面が自然光を浴びる空間におかれた3点と新作とを、交互に昼夜、終日見つづけた。近年、自由美術特有の情念的抽象作品群に混じると、とりわけエッジがきいて完成度の高い印象があった。正方形をひし形に設置、中心よりやや下に黒い線を主軸に目立たせないように水平

を基調として、横にパースペクティブの潜在を意識し展開させる。題名はすべてが「黒い線」。作風はマスキングテープを駆使した手法、縦、横、斜めと繰り返し反復させて画面構成を試みている。

テキスタイルを思わせる画面からインテリア

要素も多分に含まれるのは否めないであろう。時折偶然に生まれるクロスの交差部分に細かい色彩がちりばめられ、引いて鑑賞した折にリズムミカルなハーモニーを憶わせるのが特徴といえる。随所に処理されていない部分については技術的課題も見出せた。とはいえ会員となった新作では曲線にチャレンジし命のようなモノを織り込む意図であろうか卵の形態を「筆で描きこみ」無機質から有機性へ移行しはじめている。山口県在住、1940年生まれ、60からの出品、出発である。

鑑みれば老若、生活条件など絵の前で意味をなさない、育種家が土壌を整え交配し開花を待つ。開花寸前に自然の猛威に見舞われることもあるだろう、ともかく「新種の花」を1輪咲かせ自分が名付け親になればよいのである。それが覆輪になりゴウジャスにカタログに掲載され売上の品種と変貌すれば世にいう成功かもしれ

ない。あるいは枯れても「花があったという既成事実」が残ればいい。

師のひとりは今私と同じ年に他界している。60前であった。彼の言葉に「自分の作品を MOMA において考えてみたら…」が胸に括られる。どれくらい視覚耐久時間を保ってられるか、残酷に客観視する姿勢が必須である。吉崎作品の横にブリジッドライリーを並べてみよう。あるいは、グリッドといえはのモンドリアンも隣に挟んでみよう。瞬時に恐ろしい結果が出てくる。(類型作品に「〇〇派」という美術の用語もあるのだが、) つまるところ表現の根源には相当なエネルギーを蓄積してしかるべきなのだ。描きたい欲求の根っこが、どこまで情熱を吸い上げるか、吉崎作品の根っこが今後どのような多様品種を極めていくのかを期待する。

辻 忍さんの作品について

長 嶋 栄 次



立体第1室の北壁に沿って並んだ4点は昨年度の新人賞として、そして第2室には今年81

回展の大作2点が並んだ。いずれも堅木の樺材による抽象的な木彫作品である。

大小はあれ、合計6点もの作品を一堂に展示されたエネルギーには先ず敬服する。

「10年のとき」と題された作品は高さ2m余り、巾20cm位の細長な盤上に6ケの球体を掘り出し、両脇に紐状の帯がつく。球体を歳月の区切りとして、段状に辿る趣向と思われた。「水にとどく」は前の作品と同じ位の大きさで、2本のオール状の足が伸びて水面に達している様子だ。

「結いをとく」は何かの絆からの解放を暗示するかのように、杵状に口を開いた下方が広がっている。

そして「トビラより」と題した60cm角程の扉を表現したレリーフが壁に掛る。

以上4点の形容について簡単に記したが、解説するような題名の作品との関連を考えるうちに、むしろ写実的で、当初に抽象的としたが具象作品の分野だと思い直した。

それぞれの作品は達者な技術と丁寧なつくりで、作者が楽しんで制作に励まれた様子も窺える。

が、しかし同じ木彫を手掛ける者として感じ

ることは、少々技巧的な細工にこだわり、全体を貫く意志や緊張を弱めていることだ。

1つには、木を彫り刻むという緊張感から生じる線や面の美しさを、サンダーで削り去って滑らかに均したり、仕上げに折角の木肌を櫨色のステインで覆ってしまうなど、作者の息遣いを消すようで寂しいことだし、工芸的で、塑造のように見える。木肌は年を経る程に美しくなっているのだから。

もう1つは展示のありようで、作品が壁に立てかけてあったり、寄りかけたり、掛けたりと多様であるが、どれもが休憩の姿勢だ。作者が好んだ博物館での陳列のようで元気が無い。平面的な視野からだけでは彫刻の示す量感や動静が伝わり難く、勿体ないことだ。

同じ作者による第2室のしっかりと構築されて屹立する作品や2年前の清々しい作品などと想い較べてしまう。

ちょっと辛口が続いたが、辻さんのいろいろなことへの試みや工夫など積極的な制作姿勢は好ましく、こちらも励まされる次第だ。

これからの益々の活躍が期待されます。以上

辻本さんの作品を見て

渡 邊 知 平



新人賞及び今年の自由美術出品作3点を見て素材は鉄、重く硬い鉄と云う素材も辻本氏の手にかかると、軽やかで素材に対する躊躇いと云うものがまったく感じられない。「能あるものは」と題された作品では、包帯の様なものでグルグルと巻かれた人体、一見痛々しく思われるが近くに寄ると、体の内部に手らしきものがあり、キャプションを見て思わず笑ってしまいそうになる。

まさか内部に爪が隠されているとは！

包帯の中には爪だけでなくユーモアも隠されていた。また、お尻の辺りに破裂した様な跡が有り溢れ出た才能であろうか？

「歌う人」でも彼の人の頭の中は音符だらけで、口を開ければワラワラと音符が溢れ出てくる様で、左手を楽器の上に踊らせ右手で指を鳴らしリズムを取り、なんともユーモラス。

確か昨年出品されたおりは題名の後に(喉仏)とあり、私は今回も(喉仏)を入れてほしかった。しかし不思議とユーモラスの向こうに、うっすらと悲しみか孤独の様なものが透けて見え、作品の存在にふくらみと、豊かなものを感じました。

今年の自由美術に出品された「アクロバット」と題された作品では、ユーモラスな気配は微塵もなく確かな造形力と、シャープで抽象的かつ

確実な形態で見事に空間を支配している。

人体を逆立ちさせることで、より抽象性が強まっている気がします。見ているうちに改めて人体と云うものを考えさせられました。しかし今さら人体・具象彫刻の可能性を云々いうつもりはありません。土偶や埴輪など自然崇拜への想い、神や理想の形としての人体、日本の仏像など、古代より今に至るまで彫刻のモチーフ主題として人体は取り上げられてきました。

ヘンリームーアの抽象彫刻で骨をモチーフにしたと思われる作品群がありますが、それを見てスーッと此方側に入ってくる形態で、抵抗もなく共感できる形はなんだろうと考える。

あのムーアの作品の形態は、私達が持っている、私達の内に存在する形で人間を含め全ての脊椎動物の内に存在する骨の形なのだからと、気付かされる。人体と云うもの考えた時、当然のように人は自分自身の形に興味を持ち、拘り、そこに美を求め際限なく追求して人体を作り続けてきた。辻本氏のエッジの立った逆立ちした人物の形は私が持っている私自身の形なのだとあらためて感じました。

ちなみにムーアの人体をモチーフにした作品にはよく、穴が開けられていますが「アクロバット」にも胸の辺りに穴が開いています。

展 覧 会 よ り

的場脩二展「記憶の変容」 小 野 精 三 千駄木画廊 2017 年 11 月 20 日～ 25 日



彼とは、私が展覧会部のころギャラリー青羅での新人賞展ではじめて知り合った。新会員と同時受賞である。仕事から私は毎日、会場に詰めていたが同じように毎日来る出品者がいた。的場さんだった。すぐに意気投合し自然と絵の話をするようになり時間を忘れるくらいだった。それから、三重では色々な展覧会、個展を見られないと思い、合間をみて銀座を歩いて回った。大変気に入ったみたいでそれから毎年のように、東京に来たときに画廊を見て回った。東京での個展は彼にとって初めての展覧会だ。

画廊に入ると、今回の個展の為に毎日6時間絵を描いていると言うだけあって作品の凄い熱気が伝わってきた。 恐るべし…。

会場には3通りの違う絵があるように思われる。

ひとつは、今までの様式で自由美術展に出品した絵。この絵は描こうと思えばいつでも描けると彼は言う。二つ目の作品は、彼がヨーロッパへ行った時に、ガウディの建物にあったモザイクのある部分に感動し、これを取り入れて色面で構成した作品で、完成度の高い作品だ。私はこれからこの絵を追及していこうと思いますと彼は言う。だが一歩間違えると動きのない堅苦しい絵になるので難しそうです。求心力がある絵なので、広がりが作品を構成するうえで重要になると私は思う。

三つ目は画廊に入っすぐの小品で即興的に描いた軽快な作品、これは彼の意外な器用な面を感じました。

個展のテーマである「記憶の変容」がこれからどう変わるのか楽しみである。

追 悼

ニシオトミジ兄の仕事

森 田 廣



「輪廻- 1517 (1)」

ニシオトミジと言えば、その生を閉じるまで50年近くにわたった「輪廻」シリーズを語ることになるだろう。

1998年の個展で見た初期作品には、アンフォルメルやアクションペインティングの試みがあり、若き日のニシオの意欲と自負を見せていた。その後、自由美術に参加、シュール的な展開を経て、1996年には人体を暗示する描線にエロスをやどす作品「輪廻」シリーズの第一歩を踏みだしている。当初はかなり饒舌な表現であったが、次第に単純化され、1975年、自由美術賞を受賞した。

人の生死の連続はまさに輪廻転生である。無

限の時間の一瞬一瞬を生きる「生」の証を形にしたい。生の根源に人間の「業（ごう）」とも言える性を置いていのちを捉えたい。それが自分の作品の指針である。と彼は折に触れて語っていた。

ただ、その性表現はポルノ的な形とは異なり、隠微なエロスの喚起である。曲線に沿う陰影、その濃淡の階調による谷間や隆起は女体の肌や下腹部とか臀部を連想させる。全き平面として描かないのは生の温もりを大事にしたいからだという。陰影のグラデーションはH9からB10まで鉛筆を駆使したもので、まるで吹き付けのように見える。

いつの頃からか「出来るだけ何も画かない。何もないところに有を感じさせたい」と頑なまでに持論を抱いていた。仏教の説く「無即有」の境地に近づきたかったのであろうか。

反面、先に述べた鉛筆のメチエに見るように、極めて職人的気質も持ち合わせいた。たまたま松山の画廊主が鳥取に来訪、輪廻シリーズに出会ったのが縁で、ニシオは毎晩ハガキ大の用紙に写実の画を修行のごとく描きつづけ、それを7年の間画廊主に送っていた。2009年画廊主の提供により2000点におよぶハガキ作品を展示した。花・果物・魚・蝶・道具類等々の細緻でリアリティーのある描出は、画家の眼と共にすぐれた職人の手を思わせたのだった。言わば、その写実力が、全く対蹠的な単純化の極点をめざす輪廻シリーズを支えていたのである。

「無即有」或いは「有即無」の理念は絵画表現と著しく矛盾する。矛盾を噛みしめながら彼

は可能な限りの接近を図っていたのであろう。まして、そこに根源としてのエロスをひそませるという制作意図はまさしく「業」と呼ぶものに違いない。生涯の仕事としてその「業」を負いながら、彼は忽然と逝ってしまった。－確か

な成果を見せつつも、いい絵とは何かを自らに問いながら。

ニシオトミジ兄よ、貴兄が遺した「輪廻」の成果はいつまでも褪せることはないだろう。

赤堀正巳氏を偲んで

久松孝彦



「96 - 1 影」

「96 - 1 影」、国立美術館第10室中央壁面にその作品は展示されていた。赤堀正巳氏の遺作である。氏独特の微かに陰鬱さの漂うグレーの色調のなかを走る鋭い線、持ち前のデッサン力がいかに発揮された100号の大作である。

3月に訃報が届いたが、少し前に、地元静岡の藤枝市で開かれた個展でお会いしたときには、ちょっと痩せられたかなと思ったが、とてもお元気な印象だった。

私が初めて赤堀氏と出会ったのは、もう今から35～6年前になるだろうか。氏は当時、静岡県内でも既に中心的な人物として活躍しており、特に静岡自由美術展との関わりにおいては多くの作家を輩出している。長年、美術教師と

して勤めながらも、その生き方そのものが作家として何ら矛盾無く氏の膨大な作品群として描き出されてきたと思われる。

そんな赤堀氏のいかにも氏らしいエピソードがある。通勤電車の中で、常にスケッチブックを片手に電車内の乗客の姿を描き続けているうちに、下車駅を乗り過ごしてしまったこと、また、職員会議中も無意識のうちに手に持ったペンで居並ぶ同僚達を描きはじめってしまったことなど、笑いながら話してくださった。

以前、氏が表現の手段として自分には絵しか無いのだというようなことをおっしゃった事があった。日常の様々な人間の形態を追求し、その本質までもとらえようとする真摯な姿勢は88歳の生涯を閉じるまで、変わることは無かつ

た。

自由美術賞をはじめとした数々の受賞等、作家としての実力は言うまでもないが、それと共に、静岡県での文化活動に対して受賞された文化奨励賞は美術界のみならず広く一般県民の知るところである。

3月はまさに別れの季節であった。葬儀では

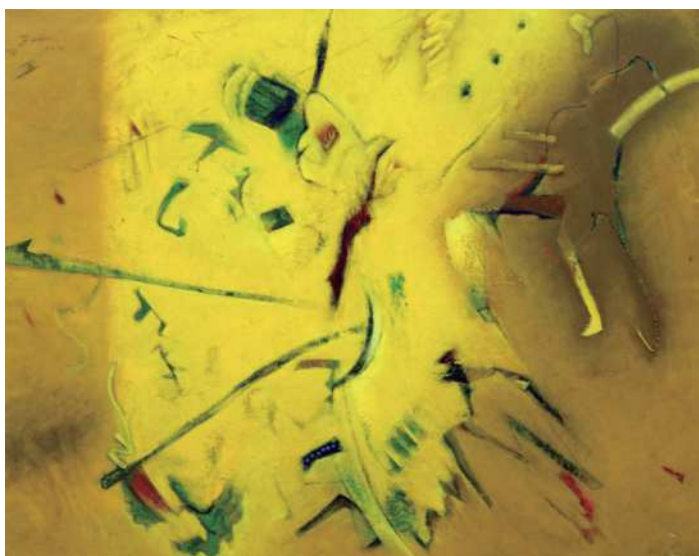
氏を慕い、尊敬し、指導を仰いだ大勢の人々が集まり、氏の温かく誠実な人柄を偲び別れを惜しんだ。

私達自由美術の仲間も、むろん誰も皆わかりきっていたことだが赤堀氏の存在の大きさが改めて確認された。

感謝と共に心よりご冥福を祈りたい。

よろずふきこさんを悼む

吉 見 敏 治



「封印された記憶-Ⅲ」

1961年(昭和36年)京都芸大在学中に初入選。その年に私も新会員になった。転宅して京都支部から大阪支部へ移られてから50年にわたる付き合いである。事務所と会計をそれぞれ分担し、ともに大好きな自由美術に関わってきた。

数多くの洋画団体がひしめく関西画壇の一隅で苦勞を分け合った。会合を招集しておきながら当日になってド忘れし、大失態を演じ、みなさんに迷惑をかけるということがあったり、その他時々のエラーを全てカバーしてくれていた。お蔭で何とか30数年勤めることができた。

バランス感覚抜群の女性で、常に慌てず冷静で、緊急時の対応もOKであった。

旅が好きで、ラダック(中国北西部・ウイグ

ル地区)の奥地へ女性だけで出かけるという無鉄砲さも片やに持っておられた。思い込むと直ぐ行動に移すパワーには舌を巻く。大阪支部の会合を六甲山上の保養所(一泊)で開いたとき、ラダック紀行のビデオを、みんなで楽しんだ記憶が蘇る。

私自身、彼女や上さんたちのグループに加わり、ベルギー、オランダ紀行の一員としてクレラミュー美術館を訪れたこともあった。“極めつき”はミャンマーへの旅。ここで或る光景(夕陽)に遭遇。魅了され「封印された記憶」シリーズが始まる。大地一面が黄金色に染まり、鮮烈で至福の時を浸りきった当時を何度か振り返り話された。このシリーズは亡くなられる直前

まで続いた。

まず黄金色ありきから始まるのだから的確な表現は容易に手に入らず試行錯誤の時期も続いたのではないかな。それでも、このテーマを絶対に手離すことはせず執念を感じさせた。

ここ数年にきて色調の純度もたかまり、マチエルも輝きを増しつつあった。「到頭、何かを把んだな」と眼を瞠りながら密かに近作を眺めたものである。

夾雑物も一切払拭され切った心境だったに違

いない。その矢先の急逝……

皮肉な巡り合わせを悔やまずにはいられない。無念だったと思う。

でも、遠くない時期に私自身が“黄泉”を訪れ再会し、その後のあれこれを話合いたいと思っている。たっぷり時間はあるだろうから……

—合掌

中尾知子氏を偲んで

山 崎 由 佳



「窓の外」

今年の1月末に、中尾知子さんが亡くなられました。

彼女は謎の人物で、私だけでなく今の自由美術協会内でも、彼女と深く関わりを持った方(特にこの20年間)はいないのでは — と思っています。

彼女の40年ほど前の作品のひとつですが——無彩色の仮面のような人物、その背中に憎々しげな鋭い罰印——強烈でした。いまだに彼女を思い浮かべると先ずはこの作品を思い出しま

す。

彼女は聾啞者でした。後に人づてに聞いたのですが、家庭の事情や自身の離婚が原因で、当時酷く男性不信に陥っていたとのこと。あーあそのような状況の中で生まれた作品だったんだなあ — と納得したものです。

でも若かりし頃の彼女は、展覧会にも、会合にも出てきて、みんなともにこやかに会話をしていました。物おじしない性格の為か、聾啞というハンディを感じることはありませんでした。今でも当時の彼女の素敵な笑顔を思い出します。

しかし、もう 20 年が経ちましたが――。
突然あの忌まわしい阪神淡路大震災が起きたのです。芦屋に居住していた彼女も、もちろん被災者の一人でした。ほとんどの人が底知れぬ恐怖と混乱に右往左往し、現状を把握することが出来ませんでした。未だに立ち直れぬまま孤独死をする人も後を絶ちません。ましてや障害のある彼女が陥ったパニックがいかにほどのものか――察してもあまりあります。

それ以降、彼女はいっさい姿を現さなくなり、作品だけが送られてきました。しかし以前の作品からはまったくかけ離れた作品の数々で――。

アクリル絵の具を何層にも塗り重ね、重苦しく、暗く、ぱっと見ると何が描かれているのかわからぬが、じっくり見ていると犬の顔が何かを訴えかける（まるで制御できぬ心のカオスをぶちまけている）ような作品ばかりでした。

彼女はその様な作品を晩年まで描き続けたのです。

亡くなられて徐々に解ってきたことですが――

彼女は震災のショックとその後の様々な出来事に対応できず、心の病を患って閉じこもる日々であったらしい。誰にも心を開かず、孤独とあらゆるものに対しての不信感に苛まされ続けた日々であったとのこと。唯一の安らぎが犬との語らいであったと聞いています。

私には、震災後の作品の数々は全てその時々彼女の自画像ではなかったのか？と思えるのですが――

謹んで彼女のご冥福をお祈りいたします。

澤田昭英氏を偲んで

谷 内 徹



「横たわる人」

澤田昭英氏と初めてお会いしたのは、私が高校の美術の教員をしていた昭和 52 年頃で、富山県高等学校教育研究会美術部会の席であったと思う。年齢が 13 歳も年上であり、駆け出しの私に比べ、彼は貫禄もあり優れた大先輩であった。その後、高校生美術展や青少年美術展、教職員美術展など、富山県の美術教育に関する展覧会などで会う機会も増えていった。美術部会や展覧会などでは様々な意見の取りまとめ役、中心的な存在でもあった。特に印象的だったのは、美術教育に関する授業時数の削減に対する意見であった。どの教科も単位数を奪いあう中、美術は弱い立場にいつも立たされていた。各学校のカリキュラム委員会は紛糾し続けた。そのような状況の中で澤田氏はいつも我々を励まし、声高に美術教育の重要性を訴え続け

ておられた。理想論だけではなく、美術教育に対する熱い情熱と生徒を思う強い気持ち、実績がなければ、他教科の先生方への賛同は得られないであろうと語り続けられた。彼の持論は、より情熱的、指導的、そしてお手本の様にも思えた。

澤田氏は美術教育の面でも優れていたが、一人の洋画家としても特筆すべき人であった。彼は金沢美術工芸大学油絵科の出身であり、数多くの展覧会に出品しておられたが、所属美術団体を決めかねておられた。

昭和 55 年に新生第 1 回自由美術富山グループ展（同展は昭和 38 年頃に結成されていたが、多くの脱退者などで中断していた）が開催された。敬愛する澤田氏を同グループに誘い、快諾を得た。当時の出品者は彫刻が 9 人、絵画は 3 人であった。その後、隔年に開催し今年で 19 回目をむかえた。彫刻が 4 人、絵画が 13 人となった。（絵画の中には澤田氏の遺作も含まれていた）

澤田氏は東京都美術館や新国立美術館開催の自由美術展に出品し続け、その後会員とされた。彼の代表的な連作「蜘蛛の糸」は人間の傲慢さ、ひ弱さだけでなく深い人間愛に根ざしていた。又、社会現象や俳句、短歌をモチーフにした作品も描いておられた。生徒に慕われた美術教師である澤田氏と、人間愛に根ざした彼の作品群はどこか共通している様に思われた。

教員として中学校や高等学校を歴任し、定年退職後は富山県洋画連盟委員長や魚津市文化協会会長などの重責をはたされた。富山県の洋画界にとっても非常に大切な人であった。今年の 7 月 15 日の未明にアトリエで制作後、階段で倒れた。病院に運ばれたが、心筋梗塞で帰らぬ人となった。8 月 3 日の自由美術富山グループ展には彼の遺作が展示され、その横には井上長三郎氏や鬼頭曄氏と一緒に並ぶ澤田氏の写真があった。時の流れを感じると共に万感の思いがこみ上げだ。澤田昭英氏の存在の大きさを偲びつつ…。



井上長三郎氏・鬼頭曄氏等と（1986 年頃）

個展・グループ展 記録

2017年3月～2018年2月

2017

3/9 (木)～3/12 (日)	第42回秋田県秀作美術展	木村恭己 齊藤昇 佐々木厚子	秋田県立美術館
3/10 (金)～3/18 (土)	吉村利美・平澤重信二人展	平澤重信	アスクエア神田ギャラリー
3/11 (土)～3/16 (木)	Rin展		Gallery鈴Rin
3/16 (木)～3/19 (日)	新井富美子展		画廊・タンギー
3/17 (金)～3/22 (水)	醍醐イサム個展		ギャラリーれがろ
3/20 (月)～3/26 (日)	下倉節子彫刻展		銀座アートホール
3/20 (月)～3/25 (土)	版画Allumage展	笠井順子	K's Gallery
3/22 (水)～3/26 (日)	森野会展	寺床 まり子	町田市立国際版画美術館
3/27 (月)～4/1 (土)	岸川理子展		中和ギャラリー
4/3 (月)～4/8 (土)	第81回自由美術 広島展		広島県立美術館
4/4 (火)～4/9 (日)	2017 “U展”		埼玉県立近代美術館
4/5 (水)～4/9 (日)	第18回赫KAKU展		兵庫県立美術館
4/5 (水)～4/14 (金)	醍醐イサム個展		ギャラリー棟 3F・ギャラリー
4/7 (金)～4/9 (日)	第35回 修羅譜展		Gallery銀座一丁目
4/8 (土)～5/25 (木)	洋画Sparkling!	谷内徹 平田寛子 水上里美 水野利詩恵	府中グリーンプラザ(5F・展示ホール)
4/11 (火)～4/16 (日)	自由美術佳作賞展	阿久津隆 五十嵐久美子 坂田均	庄川美術館
4/21 (金)～4/26 (水)	POETIC	田中敬子 山田哲夫 辻本又慶 中西保裕	
4/25 (火)～4/30 (日)	第49回 2017 黄人展	醍醐イサム 柳田祐希 辻忍 山田かの子	ギャラリーれがろ
4/29 (土)～6/25 (日)	池田宗弘展		広島県立美術館
5/2 (火)～5/7 (日)	第68回 中部自由美術展		朝日美術館
5/2 (火)～5/7 (日)	2017自由美術協会京都作家展		
5/2 (火)～5/19 (金)	大崎和男作品展		愛知県美術館ギャラリー
5/2 (火)～6/29 (木)	大野美代子展		京都府立文化芸術会館1階大陳列室
5/5 (金)～5/13 (土)	國定正彦展		新得町公民館 ふれあいロビー
5/10 (水)～7/31 (月)	自由美術の仲間たち	小坂格 笹賀捨雄 西尾裕 宮下光子 応和義明	ゆとろぎ美術館
5/11 (木)～5/17 (水)	Art Joint 3	嘉屋重順子 中元寺俊幸 根本達展	ギャラリーストークス
5/16 (火)～5/25 (木)	Resonance	小野田志津代 松崎九鬼洋子	ボラギャラリー
5/17 (水)～5/26 (金)	吉見博展	小川リエ	Gallery Concept21
5/20 (土)～5/28 (日)	平澤重信展		ギャラリーストークス
5/20 (土)～5/27 (土)	第6回東京自由美術展		神楽坂セッションハウス 2Fガーデン
5/22 (月)～5/27 (土)	那須ゆいか展		Art Space 水音
5/22 (月)～5/28 (日)	伊藤朝彦自選展		東京都美術館
5/30 (火)～6/11 (日)	醍醐イサム個展		うしお画廊
5/31 (水)～6/6 (火)	嘉屋重順子展		千駄木画廊
6/5 (月)～6/11 (日)	第43回立川平和美術展	大野美代子	ギャラリーストークス
6/8 (木)～6/14 (水)	石川忠一を囲む会	深澤義人 村秋木綿	ギャラリー ブラック
6/9 (金)～6/18 (日)	第63回 練馬区美術家協会展	小川リエ 松本明	
6/15 (木)～6/21 (水)	新宿・自由美術15人展		立川市市民会館展示室・
6/19 (月)～6/24 (土)	交流の多様性と進化展	醍醐イサム	地下1階(たましん RISURU ホール)
6/22 (木)～9/3 (日)	The 16th International Triennial of Small Graphic Forms	笠井順子	ギャラリー絵夢
6/25 (日)～7/2 (日)	醍醐イサム個展		練馬区立美術館 3階展示室
6/26 (月)～7/1 (土)	2017 “U展” 千駄木展		ギャラリー絵夢
6/30 (金)～7/5 (水)	第33回ぐんま版画展	石井克 多胡宏 中林三恵 吉田光正	GINZAギャラリーアーティスト スペース
7/1 (土)～8/27 (日)	岩渕欣治展		Villa Gallery
7/3 (月)～7/14 (金)	平澤重信展		彩画堂ギャラリー
7/5 (水)～7/17 (月)	17th アートinはむら展	大野美代子	千駄木画廊
7/5 (水)～7/10 (月)	佐藤泰子展		高崎シティギャラリー 第一展示室・予備室
			朝日美術館
			あらかわ画廊
			羽村市生涯学習センターゆとろぎ
			カフェ北都館ギャラリー

7/7 (金)～7/15 (土)	第20回綺羅星★展	宇野之雅 笠井順子 窪田旦佳 小暮芳宏 深澤義人 依田元明	千駄木画廊
7/10 (月)～7/15 (土)	第4回ボールペンアートの世界展	鷺巣瑳環	画廊るたん
7/11 (火)～7/18 (火)	昭和の面影	平澤重信	ギャラリー枝香庵
7/11 (火)～7/23 (日)	醍醐イサム個展		ギャラリー絵夢
7/17 (月)～7/22 (土)	ARTFILE展	寺床まり子 一ノ澤文夫	K's Gallery
7/18 (火)～7/23 (日)	第39回静岡県 自由美術展		クリエート浜松31ギャラリー
7/24 (月)～7/29 (土)	Prints 6 exhibition	笠井順子	樺画廊
7/25 (火)～8/6 (日)	杉吉篤展		TO OVギャラリー
7/25 (火)～7/30 (日)	第59回東中国 自由美術展		岡山県天神山文化プラザ第1展示室(1F)
7/31 (月)～8/5 (土)	GALLERY HINOKI ART FAIR XIX	中野渡みね子 永畑隆男	ギャラリー檜B・C
8/3 (木)～8/15 (火)	田中秀樹個展		たましんギャラリー
8/3 (木)～8/6 (日)	第19回自由美術富山グループ展		富山県民会館美術館
8/8 (火)～8/11 (金)	2017年・第53回 自由美術・秋田展		秋田さきがけ展示ホール
8/14 (月)～8/19 (土)	有難う。本当に有難う林 紀一郎展	佐藤由喜子 深澤義人	ギャラリー暁
8/15 (火)～8/20 (日)	第55回 自由美術関西展		京郡府立文化芸術会館
8/16 (水)～8/20 (日)	第44回自由美術香川		善通寺市美術館
8/18 (金)～8/20 (日)	17栃木自由美術展		足利市民会館 別館展示室
8/21 (月)～8/26 (土)	田中秀樹展		中和ギャラリー
8/21 (月)～8/30 (水)	Friend展	池田宗弘 宍戸美恵子 古田由美子 森 真 柳田祐希 吉村俊 渡邊知平	ギャラリー絵夢
8/23 (水)～9/3 (日)	“TOKYO”ART SHOW 2017 ARTISTS FROM JAPAN IV	小野田志津代 小野田勝謙 小暮芳宏	ASHOK JAIN GALLERY
8/24 (木)～8/27 (日)	2017山口自由美術展		防府市地域交流センター アスピラート
8/25 (金)～9/3 (日)	2017海の日芸術祭	寺床まり子 岸川理子	あだたら高原美術館
8/26 (土)～8/30 (水)	第52回自由美術群馬展		ノイエス朝日
8/26 (土)～9/3 (日)	NINGENTEN2017 COLLABORATION	寺床まり子	六本木ストライプスペース
9/4 (月)～9/9 (土)	aku・aku アクアク	小山雅子 竹内敏江 醍醐イサム	GINZAギャラリーアーティスト スペース
9/14 (木)～9/24 (日)	あしがり美術館	小山雅子 辻忍 竹内敏江 醍醐イサム	あしがり郷「瀬戸屋敷」
9/20 (水)～9/25 (月)	平面小品展		ギャラリーストークス
9/25 (月)～9/30 (土)	則松正年展		ギャラリー5 8
9/27 (水)～10/2 (月)	版の魅力 ～自由美術メンバーによる版画展～		ギャラリーストークス
9/27 (水)～10/7 (土)	自由美術作家小品展(コレクションより)		千駄木画廊
10/2 (月)～10/7 (土)	瀧田紀子展		K's Gallery
10/4 (水)～10/16 (月)	第81回自由美術展		国立新美術館
10/4 (水)～10/14 (土)	平澤重信・高橋靖子・佐藤榮美子3人展		ギャラリーストークス
10/5 (木)～10/12 (木)	2017 MARINE DAY ART SHOW IN NY	寺床まり子 岸川理子	The Nippon Gallery at the Nippon Club (New York)
10/9 (月)～10/14 (土)	田村仁展		ギャラリー・オカベ
10/9 (月)～10/14 (土)	有田敬子展		GALLERY STAGE-1
10/24 (火)～11/1 (水)	長谷川由美/不安と恍惚		あらかわ画廊
10/25 (水)～10/30 (月)	第80回自由美術京都展		京都市美術館2F
10/31 (火)～11/5 (日)	窪田旦佳展		Gallery美庵
11/7 (火)～11/12 (日)	第25回朝霞市美術協会展	醍醐イサム	朝霞市中央公民館ギャラリー
11/16 (木)～11/22 (水)	まほろば 佐久に咲く 素描展	平澤重信	ギャラリー絵夢
11/17 (金)～11/22 (水)	第3回新宿スカラベ展	姫井美貴子	ポルトリブレ
11/20 (月)～11/25 (土)	的場脩二展		千駄木画廊
11/20 (月)～11/25 (土)	中野渡みね子展		中和ギャラリー
11/28 (火)～12/3 (日)	第30回多摩北部5市美術家展	古田由美子 西村幸生	清瀬市郷土博物館
12/2 (土)～12/9 (土)	うとうと干支(犬)展	寺床まり子	うとうと
12/4 (月)～12/9 (土)	美の棲む処 i-act Vol.8	中野渡みね子	ギャラリー暁
12/4 (月)～12/16 (土)	醍醐イサム個展		K's Gallery
12/4 (月)～12/9 (土)	菊池まり子展		藍画廊
12/5 (火)～12/10 (日)	第19回倉敷新鋭作家選抜美術展	三宅三奈	倉敷市立美術館

12/11 (月)～12/16 (土)	No.25 アール・デサンプル展		千駄木画廊
12/13 (水)～12/17 (日)	第81回 自由美術 (京都展)		兵庫県立美術館ギャラリー棟
12/16 (土)～12/28 (木)	宮下光子展		孔雀荘
12/18 (月)～12/24 (日)	公文淳子展		銀座アートホール
12/21 (木)～12/26 (火)	六つの交差	那須ゆいか	横浜赤レンガ倉庫 1号館2階
12/23 (土)～1/19 (金)	Xmas & はじめ展	平澤重信	ギャラリー枝香庵
1/5 (金)～1/22 (月)	第14回 平澤重信展		山口画廊
1/8 (月)～1/13 (土)	石田貞雄展		中和ギャラリー
1/9 (火)～1/14 (日)	熊野現代作家展「わたしの熊野」	坂口けい子 坂内義之 的場脩二	熊野市文化交流センター
1/13 (土)～1/21 (日)	第26回新春現代作家小品展		千駄木画廊
1/13 (土)～1/28 (日)	アートフォーラム「こころのかたち」展	多胡宏	広瀬川美術館
1/15 (月)～1/24 (水)	平澤重信 NEKOの交錯		四季彩舎
1/15 (月)～1/21 (日)	2018彫刻9人展		銀座アートホール
1/15 (月)～2/3 (土)	新春小品展	寺床まり子	調布画廊
2/1 (木)～2/10 (土)	柳田祐希絵画展		画廊 珈琲 Zaroff
2/2 (金)～2/14 (水)	現代抽象作家展-surprise II -	霊山邦夫 村秋木綿 寺床まり子	ギャラリー絵夢
2/5 (月)～2/10 (土)	版画家Allumage展	笠井順子	K's Gallery
2/12 (月)～2/18 (日)	八重洲コンテンポラリー 抽象作家展	醍醐イサム 深澤義人 古田由美子	ギャラリー八重洲・東京
2/13 (火)～2/23 (金)	満天の星空VI	平澤重信	あらかわ画廊
2/19 (月)～2/24 (土)	田中雅子展		中和ギャラリー
2/24 (土)～3/5 (月)	平澤重信個展		ギャラリー枝香庵
3/6 (火)～3/11 (日)	第34回森野会展	寺床まり子	町田市立国際版画美術館(市民展示室)
3/21 (水)～3/25 (日)	第19回赫展		原田の森ギャラリー本館1F

◇ 編集後記 ◇

このたび西村さんから編集部を引き継ぐことになりました。

ここ3年で81名の新会員を迎えました。送られてきた皆さんの決意の文章を読んで、今までの自由美術には見られなかったような斬新な作品の出現を期待しております。同時に他の団体展にはない自由美術の良さ（特色・伝統）も、共にしっかりと受け継ぎ発展させていきたいと思います。

80回展新人賞受賞者の特別展示については、4名の方に厳しくも優しい感想を書いていただきました。また、ニシオトミジさん、赤堀正巳さん、よろずふきこさん、中尾知子さん、澤田昭英さんへの心のこもった追悼文をありがとうございました。

本展のパンフでは新しい企画を・・・と今思案しているところです。

(TES)

※訂正 2017年本展パンフ27頁の標題の氏名 水野利誌恵さんは水野利詩恵さんの誤りでした。お詫びして訂正いたします。

《自由美術協会公式ホームページのご案内》

パソコンのインターネット上で自由美術協会の公式ホームページが見られます。

このホームページ上で、自由美術協会の活動内容や詳しい情報が見られます。

（自由美術展、巡回展、佳作賞展、地方支部展、会員の個展、グループ展 等、各展覧会のお知らせ。自由美術展受賞者と受賞作品、会員作品の紹介、他）国内、海外の一般の方々に広く見てもらうことができます。是非ご活用下さい。

☆展覧会情報（DM等）をお寄せ下さい。随時受け付けています。

（宛 先）〒182-0017

東京都調布市深大寺元町3-16-7

自由美術協会H P 係 相田勤

（メール） mail@jiyubijutsu.org

自由美術協会公式ウェブサイト（ホームページ）

<http://jiyubijutsu.org/>

E-mail

mail@jiyubijutsu.org

（「自由美術」で検索すると見られます）

○2018 年度会費納入について

郵便振替払込用紙で、8月20日までをお願いします。

なお、窓口での納入よりATM機納入が安くなりますので、是非、ATM機での納入をお願いします。払込の際の受領証は大切に保管して下さい。

編 集 自由美術編集部

手 島 邦 夫 西 村 幸 生

高 崎 英 明 小野田 志津代

記録・AD 相 田 勤

発 行 自由美術協会（<http://jiyubijutsu.org/>）

〒207-0031 東京都東大和市奈良橋3-572-1

TEL・FAX 042-561-1152 田中秀樹 方

メールアドレス office@jiyubijutsu.org